



# 成美っ子

学校だより 令和7年度No.9

## 「やまなし」が教えてくれたこと

第6学年担任 屋敷 涼香

6年生の国語科では、宮沢賢治の「やまなし」を学習しました。「やまなし」は、川の中で暮らすかにの兄弟が、死や自然の厳しさを体験しながら成長し、やまなしを見付けて生命の尊さや希望を感じる物語です。

物語を初めて読んだ子供たちの反応は、「クラムボンって何？表現が独特でよく分からない！」「話の内容が難しい！」と戸惑い気味。私も小学6年のとき、初めてこの物語を読んだときは、「クラムボン」で頭がいっぱいになったのを覚えています。同じように戸惑う子供たちの気持ちがよく分かりました。そんな子供たちの素直な疑問を出し合い、みんなで考えた3つの課題をもとに学習を進めました。

学習の中心になった問いは、「なぜ、宮沢賢治はこの作品に『やまなし』という題名を付けたのか」というものです。最初は、「作者はやまなしが好きだからかな？」「物語と何か関係があるのかな？」と予想をする子供や、「分かりません」と答える子供もたくさんいました。しかし、物語を読み進めるうちに「やまなしは、『命絶えても他者を幸せにする』『まわりに希望を与える』ものなのかもしれない」という考えが出てきました。そこから、「限りある命を大切にしよう」「後悔のない毎日を過ごそう」「人生はつらいことばかりではないから、楽しさや幸せを見付けたい」と自分自身とつなげて考えを深める子供の姿がありました。

私自身も教師としてこの物語と向き合った時には、子供たちとどのように学習を進めていくか、悩みました。しかし、一緒に考えていくうちに、答えが一つではないことの面白さに気付かされました。「考えることそのものが学びなのだ」と、子供たちから教えてもらった気がします。子供たち一人一人の考え方や感じ方があったからこそ、私も一緒に学ぶことができました。そして、みんなで学習することの喜びに改めて気付くことができました。誰かと一緒に考えることで、自分では気付かなかつたことに出会えます。子供たちには、友達や周りの人とのつながりを大切にしながら、楽しみをたくさん見付けてほしいです。

6年生の子供たちも、あと少しで小学校を巣立ち、中学校へと新しい一歩を踏み出します。命を全うし、次の場所へとしっかりとつながっていく「やまなし」のように、これまで培ってきた力を、次のステージでも存分に発揮してくれることを願っています。

「やまなし」の物語で静かに流れ続ける川のように、子供たちの成長も穏やかに、でも確かに前へと進んでいます。残りの小学校生活も、一人一人が自分らしく光る瞬間を重ねていけるよう、見守っていきたいと思います。



<子供たちの疑問を出し合ってつくった学習課題>